

## 大学生英語学習者の主語誤用に見られる母語干渉

### ーオンライン英作文教育の課題と英語史からの提言ー

藤城 孝輔

岡山理科大学教育推進機構基盤教育センター学習支援部門

(2020年11月2日受付、2020年12月11日受理)

#### はじめに

新型コロナウイルスの蔓延により、本学においても2020年4月からオンライン授業を開始した。筆者が担当している全学共通必修科目「総合英語」および「応用英語」ではZoomを利用した遠隔授業を開始するとともに、リアリーイングリッシュ株式会社が提供する英語Eラーニングコース「Practical English Elementary」（総合英語IA・IIB、1年生向け）、「Practical English 7」（総合英語IIIA・IVB、2年生向け）「Vocabulary for General English」（応用英語IA・IIB、3年生向け）をゴールデンウィーク明けから通常の教科書の代わりとして採用した。これらのうち総合英語に採用した2種類のEラーニングコースは文法、リスニング、リーディングの3カテゴリーからなる独立したレッスンで構成されており、学生の自学が可能である。学生が取り組むべきレッスン数は「Practical English Elementary」が春学期と秋学期の1年間で30レッスン、「Practical English 7」が50レッスンと違いがあるものの、内容には重複が見られるため習熟度レベルにおける差はさほど感じられない。このため、本学のように習熟度レベルでクラス分けを行っている場合は、教員の出す課題や授業内容の調整を通して学生のレベルに合わせた指導を行う必要がある。一方、応用英語に採用した「Vocabulary for General English」は最初に達成度テストを行って学生の語彙レベルを測定し、個々の学生にとっての未知語を学習するコースである。他の2つのコースの場合は学生が取り組むレッスンを各週の授業で指定してそれに関連した内容の授業ができるのに対し、こちらは共通するレッスンを持たない完全に自習に特化した内容である。各学生が異なる単語の学習に取り組むことから、授業の中で共通した内容を取り上げるのは難しい。

春学期の評価はリアリーイングリッシュにおいて指定レッスン数に合格することで60パーセント、教員からの課題を40パーセントとした上で、本学で行われているレベルごとのクラス分けに応じた成績調整を行った。単位を取得するための最低要件となる成績が60パーセントであるため、Zoomの使用に慣れていない学生やインターネット環境に問題がある学生でも最低限リアリーイングリッシュに取り組むことで単位を得られるようにするための配慮である。残りの40パーセントである課題については担当教員の裁量に任せられていたため、筆者はそのうち20パーセントを英作文の宿題、20パーセントを音読やZoomのブレイクアウトセッションの機能を利用したグループによる英会話など授業内で学生に取り組んでもらう課題に割り振って評価を算出した。英作文の宿題は毎週提出を求め、内容はリアリーイングリッシュのレッスンのトピックと関連したものや同レッスンで取り上げられる文法項目を使うことのできるものを中心として設定した。毎週のZoom授業の前日に提出締め切り日を設定し、学内のポートフォリオ・システムであるMylogに提出された作文に対して文法エラーやスペリング、文章の分量、論の展開などについてのコメントと評価をつけ、多くの作文に共通して見られた誤用に関しては翌日の授業内でクラス全体に向けたフィードバックと注意喚起を行った。

本稿で取り上げる主語の誤用は、こうした英作文中の誤用の中でも最も広範に見られたものの一つであり、教員からの明示的なフィードバックにもかかわらず、学生が繰り返してしまうポイントでもある。このように訂正が困難な誤用については、大半の学生にとっての母語である日本語の干渉によるものであることが疑われる。母語干渉とは話者が第二言語を使用するさいに母語の言語的な諸特徴が影響を及ぼし、誤用や非標準的な話法を引き起こす現象である。学習の妨げとなる母語からの転移として捉えられてきたが、学習者の

言語を中間言語とする見方では、第二言語習得の一過程と見なされる。<sup>1</sup>しかしインプットが限られた学習環境では誤用がそのまま定着して化石化する場合も考えられるため、指導に際しては特に注意を要するだろう。そこで本稿では、まず日英語における主語の特徴に注目し、両言語の統語構造において主語が異なる役割を持っていることを確認する。続いて、学生が書いた英作文に出現する誤用を定量的に分析して主語誤用が一般的なものであることを示すと同時に、個々の誤用例を定性的に検討してそれらに日本語の表現が影響していることを明らかにする。最後に、学生が主語の使用に関する母語干渉を克服できるようになるための授業実践の方法を検討する。特に、学生が機械翻訳に簡単に頼ることができてしまうオンラインの英作文教育においては、英語の通時的な発達がわかる英語史を踏まえた指導を展開することで、学生の英語に対する知的好奇心を引き出しつつ、安易な日英語の一对一対応を脱却できるのではないかと考える。

## 1. 日英語における主語の位置づけ

### 1-1 英語

英語において主語は文を構成するために不可欠な文法要素であり、命令文など一部の例外を除けばすべての動詞句の前には必ず主語が置かれなければならない。語順がSVO型で固定されている現代英語における主語の必須性には、主語と動詞の倒置によって形成される疑問文は主語がなければ作りようがないといった点に関係しているとされる。<sup>2</sup>このため、“It’s been raining hard.”（雨が激しく降り続けている）のような天候を表す文、“It is important to wake up early.”（早起きは大事である）のような仮主語を取る文構造においても意味のない主語が必要とされる。ただし、日記の文章のようなフォーマルでない文章においては一人称代名詞の“I”が省略される場合もある。だが、これも文脈から類推が可能な主語を積極的に省略する日本語や動詞の屈折によって主語が判断できるスペイン語に比べれば、例外的であると言えよう。一般的に文の主語の位置には名詞句が入るが、that節やwh-節、場合によっては形容詞句や副詞句も入り得る。いずれの場合も、談話構造に着目すると話者と聞き手にとって既知の情報が主語になることが多い。<sup>3</sup> I, we, you, he, she, it, theyの主語代名詞が頻繁に使用されるのは、談話の中で主語が既知の情報である一方、統語的には主語を省略できないためである。もちろん、“Who broke this window?”—“I did.”（誰が窓を割ったんだ？—私だ）のように主語が新情報となる場合もあるが、この場合話し言葉においては強勢を置いて発音することによって新情報であることが強調される。

意味の面から見ると、英語の主語は基本的に主題と一致する。ジェフリー・リーチらは“That man—I can’t stand him.”（あの男には我慢ならない）のような話し言葉を例外とし、書き言葉では主語と主題の一致が守られるとしている。<sup>4</sup>しかし、上で述べた形式主語やThere is/are構文の虚辞のthereまでもが主題であるとは言いがたい。また、英語の文では動作の行為者が主語となることが多いが、“This bottle contains acid.”（この瓶には酸が入っている）のような状態動詞の主語は行為者ではなく場所であり、受動態文においては行為を受ける対象が主語となる。<sup>5</sup>このことから、荒木一雄と安井稔が指摘するとおり、英語の主語の役割を意味的な観点のみから説明することは困難であると言える。<sup>6</sup>英語力がそれほど高くない学生の場合、英作文においては日本語で考えた文をそのまま直訳する形で英文を書く傾向が見られる。このため、主語と主題が一致しない場合などにおいて特に誤用が発生しがちである。次に日本語の主題および主格の概念を検討することで英語の主語との差異を示したい。

### 1-2 日本語

英語の主語に相当する文法機能が日本語にも存在するのかという問題は国語学および日本語学の分野で長

<sup>1</sup> JACET（大学英語教育学会）SLA研究会編著『第二言語習得と英語科教育法』（東京：開拓社、2013年）、26頁。

<sup>2</sup> 荒木一雄／安井稔編『現代英文法辞典』東京：三省堂、1992年、1412頁。

<sup>3</sup> 同上。

<sup>4</sup> Geoffrey Leech, Benita Cruickshank and Roz Ivanič 編著『コーパス活用 ロングマン実用英文法辞典』武田修一監訳（東京：桐原書店、2005年）、614頁。

<sup>5</sup> 同上。

<sup>6</sup> 荒木／安井、1411頁。

年にわたって議論されてきた。その中でも特に広く知られているのが、三上章が著書『象は鼻が長い』（1960年）の中で発表した日本語の主題と主格をめぐる研究である。三上は「ハ」を文の題目（主題）を提示する助詞と位置づけ、「象ノ鼻ガ長イ」から「象ハ、鼻ガ長イ」、「日本ニ温泉ガ多イ」から「日本（ニ）ハ、温泉ガ多イ」が作られるように、「ハ」は「ガ」「ヲ」「ニ」「ノ」といった他の格助詞を代行する形で各種の格を主題化する役割を持つと主張した。<sup>7</sup>一方、英語では主語の位置に置かれることで表される動作主や存在の主体は日本語では格助詞の「ガ」によって表されるが、「ガ」は必ずしも他の格助詞を差し置いて文の先頭に来るとは限らない。また文末と呼応して文を完成させる「ハ」と異なり「ガ」は文の途中までしか係らないという統語上の違い、「（他の誰でもなく）私がやりました」などのように新情報を提示するさいに「ガ」が用いられるなど談話機能上の違いも見られる。このことから三上は日本語文法には主題と主格の助詞はあるが英語文法における主語に対応するものは存在しないと訴えた。<sup>8</sup>三上の主語廃止論に対しては生成文法に基づく反論や人称制限の観点から主語が日本語文法にも必要であるという反証がなされたものの、「ハ」が主題を表す助詞であるという知見は今日でも有効性を持っている。<sup>9</sup>

2017年に告示された学習指導要領にあるとおり、現在では小学校中学年から「外国語活動」として英語を学びはじめ、中学校から本格的に英文法を学習することを目標に掲げている。<sup>10</sup>このように学校教育の中で英語や英文法が占める割合が増加した一方で、主題の助詞「ハ」と格助詞「ガ」の機能の違いを含む日本語文法を国語教育の中で体系的に学ぶ機会はいまだに多くない。日本語学における日本語文法は主に日本語を母語としない学習者を念頭に体系化と整理が進められてきた。このため、英語を学習する日本人学生は英作文に際して英文法を日本語にあてはめ、日本語の「ハ」で表される主題を英語の主語と混同する傾向があると考えられる。2-1で見たとおり英語の主語は主題と一致する場合が多いが例外も見られるため、学生が日英語を一対一対応させて英作文を行うとき、主語と主題の不一致が誤用の原因となり得る。以下では筆者が担当している講義で学生に課した英作文課題における主語の誤用の頻度を確認するとともに、個々の誤用の実例を検討したい。

## 2. 調査方法

### 2-1 対象となる学生と英作文課題

本稿において英作文の調査を行う対象は、2020年度春2学期（6-8月）に必修英語科目を受講した本学2年次の学生32名（うち3年次以上の再履修生3名を含む）である。大半は情報科学や知能機械工学を専攻する理系学生であり、英語運用能力に長けているとはいえない。本学では習熟レベルに応じてS、A、B、Cにクラス分けしており、該当クラスは下から二番目のBクラスにあたる。授業中に英語の音読や会話を求めたさいには、発音はたどたどしく、/θ/ や /ð/、/s/ や /z/ の発音も日本語のサ行やザ行の発音になってしまうことが多い。また、専攻分野とは異なる共通必修科目であるためか、学生の英語学習に対する動機づけは概して低めである。ブレイクアウトセッションを用いた英会話活動の中でチャットを含めて発言を一切せず、他の学生に発表を押しつける学生も一部に見られた。それでも、授業について振り返る英作文課題を課したところ、自分の英語力の向上や英語での他の学生との意見交換に楽しみを見出している学生が少なからず見られた。本稿の調査対象でもある毎週の英作文課題とそれに対するフィードバックは、本講義に関連した課題の中でも学生が特にやりがいを感じていたと考えられる。学生の負担軽減のために英作文課題を週1回から2週間に1回に減らす提案をZoomの匿名投票の機能を用いて行ったところ、過半数の学生が毎週の英作文課題を希望した。また、授業に対する自由記述のコメントの中でも、自分の間違いを知ることによって勉強になったと回答した学生が複数いた。

春2の期間中、当該クラスの学生に課した英作文の課題は次の7種類である。なお、授業で取り上げた文法項目やReallyEnglishで学習する表現を作文中で用いるように指定した週もある。

<sup>7</sup> 三上章『象は鼻が長い 日本文法入門』新装版（東京：くろしお出版、2002年〔1960年〕）、8-9頁。

<sup>8</sup> 同上、16-25頁。

<sup>9</sup> 庵功雄『「象は鼻が長い」入門—日本語学の父 三上章—』（東京：くろしお出版、2003年）、77頁。

<sup>10</sup> 文部科学省「小学校学習指導要領」2017年3月、173-178頁、2020年10月30日閲覧（[https://www.mext.go.jp/content/1413522\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf)）。

第1週 If you have a chance, which country do you want to live in? Compared with other countries, why do you think it's the best place to live? Use at least THREE different superlatives (形容詞の最上級) in your writing. (提出者数: 24名)

第2週 How often do you shop online? Which website(s) do you usually use and what do you order? Describe your experience of online shopping. (提出者数: 25名)

第3週 What do you do in your spare time? What outdoor and indoor activities do you enjoy? Please use expressions you learned on ReallyEnglish. (提出者数: 22名)

第4週 Describe your room in detail. Please use expressions you learned on ReallyEnglish. (提出者数: 19名)

第5週 Write a recipe of your favorite dish and explain why you like it. (提出者数: 23名)

第6週 What's your biggest mistake in your life? Did you have to apologize to other people? Write about the situation and how you made up for your mistake. (提出者数: 18名)

第7週 Evaluate this class. To what extent did this class help you improve your English? What did you like (or dislike) about this class? Is there anything that could have been done differently? (提出者数: 15名)

なお、個人が特定できる情報を公開することなく研究目的で上の英作文課題に対する提出物を使用する旨について最終回である第8週の講義内で学生から承諾を得た。

## 2-2 集計方法

英作文に見られる誤用の集計にはKJ法を用いた。KJ法とは、地理学者の川喜田二郎が野外科学の方法に基づいて考案したデータの記録と整理方法であり、整理統合した情報から研究課題を提起することを目的とする。<sup>11</sup>1967年に一般向け解説書『発想法』の中で紹介されて以来、本来の野外科学の領域を超えてさまざまな分野で使用されてきた。雑多な誤用や不自然な表現を含む生データである学生の英作文を定量的に分析し、そこから中心的な問題を見つけ出すには有効な集計方法であると考えた。春2学期第1週から第7週までに学内システムMylogに提出された課題（Word、PDF、手書きの画像ファイルを含む）をプリントアウトして精読し、筆者が確認できた学生の誤用一つにつきカードを一枚作成した。総数でカードは191枚作成された。続いて、それらのカードを同系統の誤用グループに分類し、図式化した。

本稿が着目する主題の誤用を含む個々の例文に対しては定性的な分析を行った。学生が書いた英文から日本語の表現を推測して和訳する形で日英語の表現を比較した。多くの場合、日英語で一对一の対応関係が見られたことから、大半の学生は日本語で考えた文を英語に直訳して文を作っていると考えられる。学生の主語誤用とその日本語訳は3-2に一覧表示し、誤用の原因を検討する。

## 3. 調査結果

### 3-1 誤用の種類と頻度

学生の英作文に見られた誤用を整理し、「名詞句」「動詞句」「分詞と不定詞」「修飾語」「機能語」「構文」「表現」「スペリングと文体的誤用」「数に関する誤用」「不注意によるエラー」の10種類のグループに分別した。ただし、冠詞や動詞の複数形も含む「数に関する誤用」および「不注意によるエラー」が疑われる例は複数のグループにまたがっている。これらを図式化したところ、以下の図1のようになった。これから取り上げる主語の誤用は太字で示してある。

<sup>11</sup> 川喜田二郎『発想法 創造性開発のために』改版（東京：中央公論新社、2017年〔1967年〕）、62-64頁。

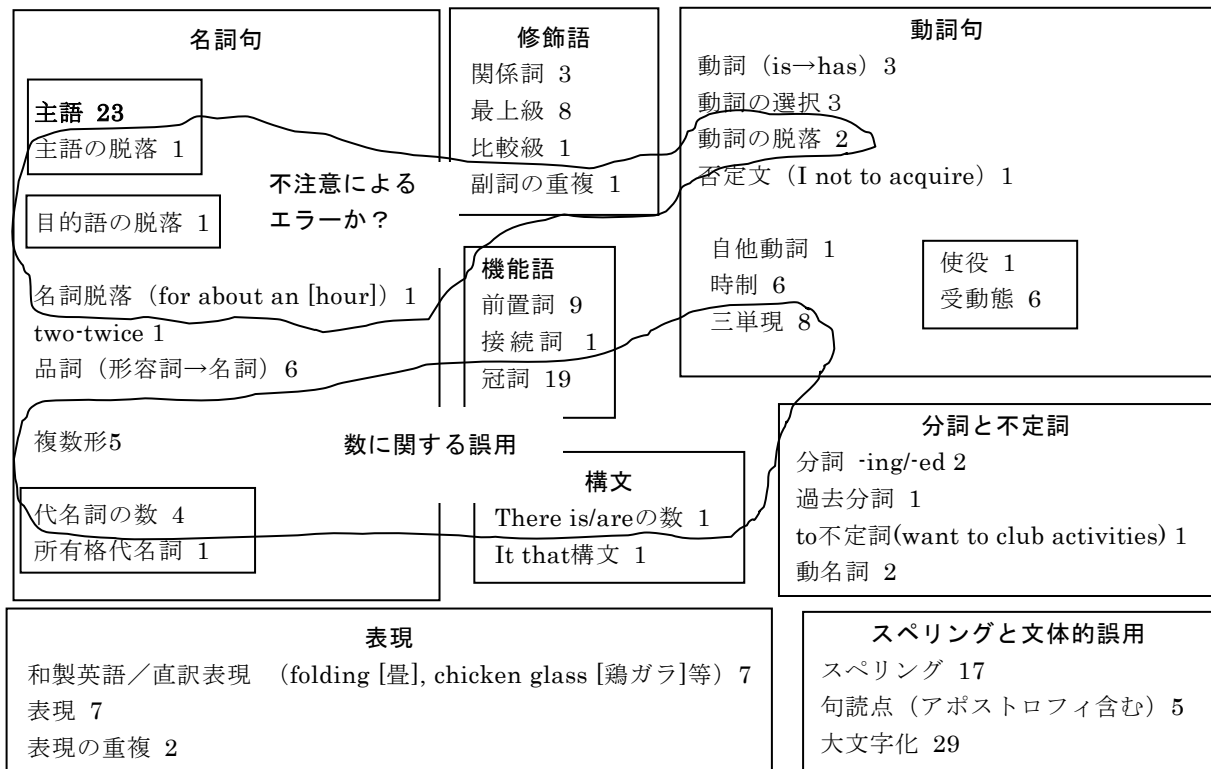


図1 学生の英作文に見られた誤用

最も頻度の高い誤用は、29件の誤用が見られた大文字化に関するものであった。英語では文頭の語と固有名詞の頭文字が大文字で表記されるが、その他の名詞の頭文字を大文字化している作文や通常大文字で表記される一人称代名詞の I が小文字で表記されている作文などが見られた。Wordなどのワープロソフトを用いて作文を行った場合、編集機能によって文頭の語や代名詞の I は自動的に大文字化されるため、この誤用は顕在化しにくい。しかし、自動編集機能のないメモ帳やスマートフォンのテキスト上に文章を書いてスクリーンショットの画像を提出した複数の学生にこの誤用が見られた。このことから、実際には学生が大文字／小文字の表記にまで十分に注意を払っていない可能性が考えられる。また、数に関する誤用も5種類の文法項目にまたがって計37件もの顕著な誤用が見られた。この中で最も多いのが冠詞の誤用である。複数形の名詞に不定冠詞をつけてしまう、母音の発音で始まる単語にanではなくaをつけてしまうなどの例が目立った。これらの誤用のうちすべてが数に関係するものではないものの、単数と複数の区別は英語の統語構造に広範囲に影響するものであるため、一つにまとめた。日本語では単数と複数の区別が文法的な要素として必須ではないため、日本人英語学習者に頻発しやすい誤用であると言えるだろう。

主題の誤用は大文字化に続いて多い24件見られた。このうち1件は“The biggest mistake in my life is that [I] overslept in the test.”と単に主語が脱落している例であり、不適切な主語が用いられている他の例とは区別される。次節にて詳しく検討するとおり、残りの23件に共通するのは日本語の主題と英語の主語を混同したと見られる誤用である。

### 3-2 主語誤用の内容

本節では前節で確認した23件の主語誤用の例を個々に検討する。一つの文例に複数の主語誤用が含まれている場合もある。作文の前後の文脈を踏まえた和訳を添えた。

1. And what I want to go most wants to go to the filming place of the movie.  
(そして私の一番行きたい場所はその映画の撮影場所に行くことです。)

主語 (what I want to go most) と動詞 (wants) が文法的には一致しているものの、意味上の主語にはな

りえない。英語では一部の動詞において主語の繰り上げによって主題を焦点化する場合があるが、ここで動詞wantの主語であるべき書き手を示す一人称のIは繰り上げによって省略できない。しかし和訳でも示したとおり、日本語では「私」を明示しなくても文章が成立する。この場合は「は」で示された主題をそのまま英語の主語にあてはめて英語にした誤用例であると考えられる。

2. Because Dubai has the tallest building in the world. Other than that, we have the world's largest international airport and the most beautiful Starbucks in the world.

(なぜならドバイには世界一高いビルがあるからです。その他にも、世界最大の国際空港と世界一美しいスターバックスがあります。)

一般的なweを用いてドバイを表しているが、話し手も聞き手も含まない人々を指すtheyとは異なり、weは書き手（時には読み手も）を含んだ一般的な人々を表す。<sup>12</sup>日本人である書き手はドバイとは異なる文化圏に属しているため、違和感が生じる。

3-5. You only have to shop online once a year. If you want to shop online, use Amazon to order.

(一年に一度しかオンラインショッピングを利用する必要がありません。オンラインで買うとすれば、アマゾンを使って注文します。)

2と同様、代名詞の一般的な用法を用いているかに見える。youの一般的な用法と解釈するとすれば、2番目の文はアマゾンをお勧めする命令文となる。しかし、この文章は“**How often do you shop online? Which website(s) do you usually use and what do you order?**”という問いに対する答えであるため、書き手の個人的なオンラインショッピング利用の頻度と使用するサイトを答えていると考えられる。ここではyouの一般的な用法であるというよりも、質問文にあるyouをそのまま反復した誤用であると解釈できる。

6-11. I sometimes do shopping online. [...] The food goes to the supermarket for buying. The medicine goes to the drugstore for buying. This is because it uses it immediately. However, cosmetics and the textbook do shopping online. This is because it thinks that it does not change even if I see it.

(私はたまにオンラインショッピングをします。食べ物はスーパーに買いに行きます。薬は薬局に買いに行きます。すぐに使うからです。しかし、化粧品と教科書はオンラインで買います。[商品を見たとしても変わらないと思うからです。])

1と同様、ここでは「は」の示す主題をそのまま英語の主語で表している文章である。ただしit thinks以降の部分のitは前の二文と同様の解釈をすれば、cosmetics and the textbookという複数を受けていると考えられ、代名詞の数の誤用も含んでいる。

12. I used to make a reservation for game software online shopping. But the reservation was canceled due to payment method issue. What I noticed was that it had a very painful experience after the release date. So I don't do much online shopping.

(オンラインショッピングでゲームソフトの予約をかつてしました。でも予約は支払い方法の問題によりキャンセルされました。私が気づいたことは発売日の後にすごくつらい思いをしたことです。だから私はあまりオンラインショッピングをしません。)

三文目のthat節内の主語itが指す対象が曖昧である。だが、四文目の「オンラインショッピングをあまりしない」という結論を導くための体験として語っているとすれば、itはthe reservationやpayment method issue

<sup>12</sup> Leechほか、646頁。

ではなく、書き手自身を指そうとしたものであると推測できる。

13. I use Amazon. However, online shopping can be different from photos, so it may fail.

(私はアマゾンを利用します。しかし、オンラインショッピングは写真と違うことがあるため、失敗する場合があります。)

「オンラインショッピングでは写真と実際に届く商品が異なる」という意味であるが、場所を指すonline shoppingが主題化されて主語の位置に来ているために言葉足らずな表現になっている。

14. I shop online once or twice a month. The site uses Amazon.

(私は月に1、2回オンラインショッピングをします。サイトはアマゾンを使います。)

この例の二文目においても主題が主語の位置に来ることで不自然な表現になっている。ここでのuseを能動受動態と解釈した場合、意味上の対象であるthe siteが主語の位置に来ることは可能である。<sup>13</sup>しかし、その後useの目的語としてAmazonが来ていることから、能動受動態とすると意味上の対象が二つになってしまう。このため、話し言葉での“The site—I use Amazon.”(サイトは、私はアマゾンを使う)などのようにthe siteを主題化させた文を作ろうとした誤用であると判断した。

15-16. I see videos well [sic]. [...] A kind has abundant them. It can learn specialized knowledge.

(私はよくビデオを見ます。種類は豊富にあります。専門的な知識を学べます。)

ここでの二文目は、There is構文を用いて“There are abundant kinds of them.”とした方がより自然な表現になるだろう。しかし、主題であると見られる“a kind”を主語にしたために文法的に不適格な文となっている。三文目の主語はkindではなくvideoを意味していると考えられる。だが、意味役割としては「手段」であるvideoを主題化しようとしたため、上の14の例文と同様の問題が起きている。

17. I listen to music indoors in my spare time. I am the happiest time to listen to music.

(私は余暇の時間には屋内で音楽を聴きます。私は音楽を聴いているのが一番幸せな時間です。)

補語は主語の性質を説明する機能を持つため、二文目のbe動詞の文ではIイコールthe happiest timeという不自然な形になっている。文法的に意味の通る表現にするには、timeを補語に取らずに“I am happiest when I’m listening to music.”などにする必要があるだろう。

18-20. Outdoors, I take a walk in Okayama prefecture with my friends. Indoors, watch YouTube at home if you don’t go or go to Aeon. The YouTube you are watching is a YouTuber called (Guardman).

(屋外では岡山県内を友だちと散歩します。屋内では出かけないときは家でビデオを見るか、イオンに行きます。見ているYouTubeは「ガードマン」というユーチューバーです。)

二文目以降では3-5の例文と同様、個人的な習慣を説明するために一般のyouが使われている。そのため、文法的には正しいものの、意味的に不自然な表現になっている。

21. I enjoy play[sic] cycling which go to scenic place in my spare time with outdoor.

(私は屋外で余暇の時間に眺めのいい場所に行くサイクリングを楽しみます。)

<sup>13</sup> 荒木／安井、28頁。

関係節の動詞goの主語にあたるものは直前の先行詞cyclingではなく、文の主語にあたるIであると考えられる。そのため、三人称単数の名詞であるcyclingとgoは一致していない。分詞構文を用いて“I enjoy cycling, going to scenic places....”などと表現する必要があるだろう。

22. The reason is that [...] university couldn't go where I wanted to go.

(その理由は [...] 大学は自分が行きたいところに行けなかったからです。)

14などと同様、この文のthat節においてもuniversityが主題であることを示すために主語の位置に持ってきたことで不自然な表現になっている。

23. [W]hen I was a high school student, my homeroom teacher met after school and said, “I'm sorry. Who are you?”

(私が高校生だったとき、担任の先生に放課後会って「すみません。どなたですか？」と言いました。)

一見、“I'm sorry. Who are you?”と訊いたのがmy homeroom teacherであるかのように読める文章であるが、これは「私は他人の名前や顔を覚えられない」という文脈の中に出てくるエピソードであり、引用部分の後には「後日学校で謝った」という内容の文が続く。そのため、書き手自身が担任の教師の顔を認識できずに相手が誰であるか訊ねたと読まれるべき部分である。日本語では必ずしも文に表れない一人称の動作主を英語で表現できなかった例であると言える。

#### 4. 考察

以上の誤用例の要因は二種類の傾向に大別することができる。一つ目は主題化するために主語を用いた例、二つ目は日本語で省略されている動作主を補った例である。前者の例では、和訳を見ればわかるとおり、不自然な主語はいずれも「ハ」で自然に言い表すことが可能である。日本語では助詞の「ハ」を用いることで文のさまざまな要素を主題化できるのに対し、英語の特に書き言葉においては語順が重視されるため主語と主題が一致しない場合も少なくない。そのため、おそらく学生は日本語の文を念頭に英語に置き換えようとしたさいに「ハ」と主語を同一視したことで誤用が発生したと考えられる。後者の例も、母語である日本語が英作文の表現に干渉したものだと解釈することができる。日本語では文脈から判断のつく情報は省略されることが多い。そのため、動作主の省略された日本語の文を英語に置き換えようとすると、何らかの代名詞を主語の位置に補って省略された部分を復元しようとする。例文の2や3・5のように一般的用法としてのweやyouを用いたものもあれば、16のように何を指すかがわかりにくいitを入れたもの、23のように動作主でないものを主語の位置に置いたものなど、さまざまな対応が見られた。叙述したい内容に焦点をおけば動作主は正しく判断できるはずであるが、ここでも主題の「ハ」を主語と対応させた誤用と同様に、すでに念頭にある日本語の文に固執したために誤用が生まれたものと推察できる。

この英作文における日英語の直訳の問題は、オンライン学習ならではの課題でもあるだろう。ネット環境を中心とする授業において学生は容易に機械翻訳に頼ることが可能であり、教室とは異なり教員の目も行き届かない。本稿で取り上げたクラスでは、第8週目に行った匿名のオンライン投票で80パーセントの学生がグーグル翻訳などの機械翻訳を課題に利用したことがあると回答した。実際「サイトはアマゾンを使います」や「オンラインショッピングは写真とは違います」式の日本語文を入れると誤用例と同様の英文ができあがってしまう。また、主語を省略した文章を入力した場合はIとyouなど複数の主語代名詞が混交した翻訳文が作られた。教員がこうした機械翻訳の不備を指摘し、英語の実力を高めるためには自力で文章を作ることが重要であると伝えても、みずからの英語力よりも機械翻訳を信頼してしまう学生は珍しくない。また、たとえ機械翻訳に頼らずに英文を書いたとしても、学生が日英語の表層的な一対一対応を行い続ける限り、同様の誤訳は頻発すると考えられる。英作文と日本語文の英訳を同義のものと見なす意識から変革していかなければならない。

授業における日英語の一対一対応への対策の一例としては、現代英語の歴史的な背景に学生の関心を向けることが考えられる。英語史に目を向けると、主格や目的格など本来格の屈折が担っていた意味が語順によ



って表されるようになった過程を見ることができる。<sup>14</sup>この過程を踏まえることで、主語の位置に動作主が置かれることが多い理由と、一見例外的に見える受動態や能動受動態における主語の位置づけは合理的に説明がつく。また、天候などを表す形式主語itの出現も語順に対する意識の高まりが引き起こしたものであり、本来主語を必要としない動詞に主語を与えるためのものであったと知ること、という場面で使用するのが適切であるかを理解する助けになるだろう。こうした英語の通時的な発展の過程を紹介することで、一対一対応では説明がつかない英語固有の特徴に対して学生の注意を喚起し、機械的に暗記すべきルールではなく言語の有機的な発展の結果としての英文法理解に導くことができる。日英語の対応関係だけではなく、英語の文法形式と意味の関係とその変遷に対する知的関心を持つことが、日英語の一対一対応から脱却する手がかりとなるのではないだろうか。

## まとめ

本稿では、筆者が担当しているオンライン授業の受講生が書いた英作文を分析し、文法的誤用としては特に顕著であった主語の誤用における日本語の干渉の可能性を検討した。学生の主語の用法において特徴的であったのは、主題にしたい名詞を主語の位置に置いたことによる誤用と、主語代名詞の選択の誤りの二点であった。どちらの場合も、学生の母語である日本語からの干渉は色濃く窺える。前者は主題を表す日本語の助詞「ハ」をそのまま英語の主語に置き換えようとすることで発生し、後者は日本語の文で省略される動作主を復元しようとしたことによって引き起こされたものと推測できる。機械翻訳を手軽に利用できる環境にあるオンライン授業においては、学生の中で日英語を一対一対応させる意識が定着しやすく、主語をはじめ必ずしも対応関係が成立しない部分において誤用が発生する要因となる。このため、英語の歴史的な発達の過程の紹介を通して英語の主語の機能の理解を促すことで、無数のルールとその例外の暗記ではなく学生の知的関心を触発する授業を旨とする必要があると考える。

オンラインの英語授業で出す課題は、容易に機械翻訳に委ねることができる。Web上でのリーディングは文章をブラウザの自動翻訳機能を起動することで日本語に変わり、ライティングは日本語で用意した文章を機械翻訳にかければ英語らしき文章に変わる。リスニング問題でさえ、UDトークなどのコミュニケーション支援ソフトに音声を入力すれば文字化され、翻訳される。翻訳の精度に疑問は残るものの、このように機械翻訳の技術が発達した中で学生の英語学習に対する動機づけを維持することは大変難しい状況であると言える。だからこそ、授業では日英語の一対一対応にあてはまらない部分をよりいっそう強調する必要があるだろう。英文法における形式と意味の関係の発達をたどる通時的な視座の導入は、英語固有のしぐみに学生の関心を向ける上で有効な手段の一つであり、日英語の一対一対応からの脱却の足がかりとして期待したい。

## 参考文献

- 朝尾幸次郎『英語の歴史から考える英文法の「なぜ」』東京：大修館書店、2019年。  
 荒木一雄／安井稔編『現代英文法辞典』東京：三省堂、1992年。  
 庵功雄『「象は鼻が長い」入門—日本語学の父 三上章—』東京：くろしお出版、2003年。  
 川喜田二郎『発想法 創造性開発のために』改版。東京：中央公論新社、2017年〔1967年〕。  
 三上章『象は鼻が長い 日本文法入門』新装版。東京：くろしお出版、2002年〔1960年〕。  
 文部科学省「小学校学習指導要領」2017年3月。2020年10月30日閲覧〈[https://www.mext.go.jp/content/1413522\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf)〉。  
 JACET（大学英語教育学会）SLA研究会編著『第二言語習得と英語科教育法』東京：開拓社、2013年。  
 Leech, Geoffrey, Benita Cruickshank, and Roz Ivanič 編著『コーパス活用 ロングマン実用英文法辞典』武田修一監訳。東京：桐原書店、2005年。

<sup>14</sup> 朝尾幸次郎『英語の歴史から考える英文法の「なぜ」』（東京：大修館書店、2019年）、47頁。

# The Effect of L1 Interference on University-Level EFL Students' Subjective Errors

—Observations of Some Problems of Online Composition Teaching  
with Suggestions from Historical Perspectives—

Kosuke FUJIKI

*Learning Support Section, Center for Fundamental Education,  
Institute for the Advancement of Higher Education,  
Okayama University of Science,  
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan*

(Received November 2, 2020; accepted December 11, 2020)

This paper analyzes English composition assignments provided by those university sophomore students who were at the time taking Integrated English IIIB, a lower-level mandatory English-language course instructed by this author. Among the students' common grammatical errors and nonstandard expressions identified here, particular attention is paid to errors in identification of the subject, especially those which exhibit the effect of interference from the students' first language, Japanese. The effect manifested in such errors is twofold, one stemming from the students' conflation of the function of the Japanese particle *wa* with that of the subject in English, and the other caused by the students' attempts to recover the Japanese omitted nominative in translating their Japanese writings into English.

Compared with students in face-to-face classes, those in online classes often have easier access to machine translation, which seemingly offers a benefit but which actually results in hindrance of their development and acquisition of English-language skills. Some of the grammatical errors this author examined suggest the writers' dependence on machine translation, whether alleged or denied. Even in cases where the students claimed to their having refrained from using available online translation resources, they tended to focus on word-by-word translation of Japanese sentences for the construction of English sentences, resulting in errors similar to those produced by machine translation. In order to address this problem, it is proposed here that the students' attention be drawn to those specificities of the English language which are often ignored in word-by-word translation, with particular emphasis on the historical background and development of English grammar. By obtaining familiarity with the evolution of English grammar, the students will be able to acquire a better understanding of grammatical rules and their exceptions, an approach far superior to simple memorization.

**Keywords:** writing; negative transfer; interlanguage; subject; topicalization; machine translation; history of English.